

## 興禅院

龍雲山興禅院。大内義弘が興し、建徳元年（1370年）に無著禅師むしやくにより開山した曹洞宗の禅寺です。中津市耶馬溪の「青の洞門」をたつた一人で造った禅海和尚が得度し、修行を積んだお寺でもありません。1596年の慶長の大地震により崩壊しましたが、石垣原の合戦後、当時由布院を支配した細川忠興の命により慶長5年（1600年）に再建されました。いまでも山門の瓦には細川家の家紋があらわれています。全盛時代には由布院内に末寺が29ありました。かつては境内に教会が建てられていましたが、キリシタン弾圧により教会は取り壊され、その名残で現在は小さな塔が残っています。

また、十六羅漢像がいたるところに鎮座しており、ひとつひとつの表情がとてもユニークです。山門の両脇には木造ではなく、石造りの珍しい仁王像があります。以前はイエスキリストを表した真つ赤に染められた仁王像で、足元の柵は十字架で造られていました。この仁王像は、2016年の熊本・大分地震にて被害を受け、現在は再建されています。

## 【洞門造りの大願を立てた禅海】

今から約290年前の享保16年（西暦1731年）、秋もようやく深まりかけた9月の半ば過ぎ、石松地域にある禅寺・興禅院の境内は秋の花の真つ盛りでした。寺の山門をくぐると正面に本堂が見え、その

東側に庫裏くらが続いています。しかし、庫裏の裏手にある物置小屋につらなる下男部屋には重苦しい空気が漂っていました。この春から寺男としてこの寺に住み込んでいる市九郎の連れ添った女房のお弓が数日前から病の床についていたからです。手厚い看病の甲斐もなく、その夜遅くにお弓は息を引き取りました。

市九郎は25歳のとき、江戸の屋敷で家侍として奉公していた際にお弓と出会いました。お弓の悪知恵にそそのかされて、ゆすりや強盗、殺人などの悪事を重ねて日々を送っていましたが、犯した罪悪の数々で良心の呵責かしゃくに耐えかねていた市九郎は心の安らぐことはありませんでした。「一刻も早く悪事から足を洗い、貧しくもまともな暮らしに戻ろう」とお弓を諭し、

二人して御仏の力にすがり、更生の道をたどろうと決心しました。

二人は船に乗って四国を渡り、さらに豊後国浜脇村に上陸しました。そして、当時高德のほまれ高い靈照禅師の噂を耳にし、禅師をたよってはるばる由布郷石松村にある興禅院にたどり着きました。そして、靈照禅師の前で涙ながらにすさんだ過去の全てを告白して心の救いを求めました。静かに二人の話に耳を傾けていた禅師は、真に改心した人間のひたむきな心情に強く心を打たれ、遠路わざわざ由布郷まで来た事に同情し、この寺に住まう事を許しました。寺男として働く事になった市九郎は毎日まめまめしく働きながら、禅師の説教を聞いて心の糧とし、懺悔ざんげの日々を送って

いたのです。そしておのの死にあい、この世の無常を悟った市九郎は一念発起し靈照禅師にお願いして頭を丸め出家し、名を禅海と改めました。

ある日、この寺を訪れた旅人から下毛郡山国川のほとりに「青の鎖渡し」と呼ばれる難所があり、そこは道路がなく、川縁の絶壁にかけられた狭い材木の上を人馬が通らなければならないため、毎年何名もの人や人馬もろともに転落して激流に押し流され命を落としている事を知りました。その夜、考え抜いた禅海は、「そつだ、これこそ御仏のおぼしめしにより、自分が過去に犯した罪業のつぐないをすることで、残された半生を捧げて世の人のためにそこに洞門を彫りぬこう」と固く心に誓いました。

西暦1734年) 11月はじめ、彼は 48歳でありました。

青に到着した禅海は、のみとつちだけであらゆる困難を克服して洞門の作成に取り組みました。15年間の苦心の末、寛延3年(西暦1750年)に至って、130間(260m)にもおよぶ「青の洞門」を見事に完成させました。

その後、禅海は洞門の入り口に小さな草庵を建てて一人で住まい、安永3年(西暦1774年)8月、88歳の高齢で大往生を遂げたとされています。

翌日、さつそく靈照禅師に決心のほどを打ち明けました。「羅漢寺らかんじに参詣のおり、わしもそこを通り地況よく存じておる。中津藩一藩の事業としても決して容易なことではない。個人ではどうていできること

ではない」と、その不可能な事を説き、思いとどまらせようとしました。しかし、禅海の意志は一向に変わらず、「たとえ一生かけても掘り続け、出来上がらずにその場に朽ち果てようとも、少しも悔いることはございません。必ず私のあとに続くものが出てくるでしょう。」と言い切り、翌朝早く、手甲・脚絆に身を固め、笠・杖を手にした禅海は、3年半の間お世話になった寺の人々に別れを告げて「青の鎖渡し」に向かって出発しました。時に享保19年(西

